

## 津軽

桜の頃の弘前公園は日本一と作家の田山花袋に絶賛された津軽は、梅に桃に林檎、すももが一度咲く季節を迎えている。生物季節観測によれば桜の開花のすぐ前の一二日にはタンポポが咲き、二月前に先発した梅の開花前線が届き、ひと月まえ本州南岸に上陸した桜の開花前線がはじめ1日三〇キロメートルの速さで北上していたのが、津軽付近では一七キロメートルと緯度が上がるほど速度を落しながらも追いついて梅に桜となる。

この頃にウグイスの初鳴きにモンシロチョウやツバメの初見が集中して、ウメにウグイス、桜にツバメと春の爆発模様がぎゅっとつづつまつた閉塞前線の様相をしていして北国を一気に駆け上がっている。

冬を耐え忍んだ生き物が跳躍するよう、に爆発した春の縞模様が北上する。頂走る秀峰、岩木山が津軽の野に爆発した花の春を前景に悠然と座つてゐる。暖冬に続く暖かい春で咲き始めた桜に寒の戻りで吹雪が舞つてゐるだろうか。

津軽平野の金木町の旧家で生まれた作家、太宰治は、或るどしの春、私は生まされた初めて本州の北端、津軽半島を凡そ三週間ほどかけて一周した、……ではじまる名作『津軽』を書いた。君木山が、満目の水田の尽きるところに、ふわりと浮かんでゐる。実際、軽く浮かんでゐる感じなのである。したたるほど真蒼で、富士山よりもつと女らしく、

十一單衣の裾を、銀杏の葉をさかさに立てたようにぱらりとひらいて左右の均斎も正しく、静かに青空に浮かんいる。美女である」と描いた。

故郷に限りない郷愁を感じながらも、太宰治が、自らの運命を凝視して故郷を訪れ回想し、自分の育った風土歴史、故郷の忘れぬ人々と交歎した。

故郷に送る言葉を求められ返答に曰く”故郷は汝を愛し、汝を憎む”と吐露した。それが『津軽』である。その本を片手に今日本人が忘れた『旅』をして、今日本の日本人に見えない日本をみていたイギリス人、アラン・ブースが四四年後の同じ五月、太宰を追つて旅して『津軽』が軽は鋭い。すでに逝つた二人の一冊の『津軽』を抱えて津軽の春を限りなく味わながら、ゆづくりと旅したいものである。

(村松 照男)